



悪夢の部位



I

雑把

蝉時雨ふりしきる中、玄関が開いて息子のハチローが訪ねてきた音がした。

ワシはあわてて甚平のゆるんだ紐を締め直した。

「父さん、ただいまっ！」

ハチローがスターアスリートらしいキラキラ明るい声で居間に登場した。プロの花形野球選手だ。自慢の息子だ。だから息子といえども居住まいを正して迎える。たとえつらく苦しい気持ちの時でも。それが孝行息子に対する礼儀だ。そう思っている。ただ食卓にのった五、六本のひしゃげたビール缶は見つかった。しかも一本新しく開いて、グラスに半端に注がれている。

ハチローは部屋の中をちらり見回し、

「大変だったね」

ひと言、心のこもった口調で言った。

確かに大変だった。突然母さんが家を出て行ってしまったなんて。三日経った今でも呆然であり、却って気持ちの混迷は深まっている。

「ただ電話じゃよく分からなかったんだ。そのお、状況というか」

ハチローはそう呟き食卓の椅子に座り、冷蔵庫から取り出した缶ビールを、プシュッと開けた。昼間から飲んでいるワシの罪悪感を少しでも減らそうというように。何という過ぎたる孝行息子か。

「あの時は、ワシも混乱していたんだ。取り乱していた。悪かった。今日はせっかくお前が家に寄ってくれたんだ。きちんと話そう」

「寄ったんじゃないよ。帰ってきただけじゃないか」

と、ハチローはまた泣かすセリフを言う。一流は違う。しかもワシ等を買ってくれた家ではないか。本当にワシにこんな息子が存在するとは、とても信じられん。

「三日前の夕方だ。前の晩からどうしても神経が立って寝付けずにいたが、初めて服んだ睡眠誘導剤というのが効いた。朝方服んで起きたら夕方だった。居間に入ると母さんは痕跡はあるものの、おらんかった」

ワシはその時の光景を思い出そうと、ビールをぐびりぐびりと飲んだ。

「ケーブルテレビのドラマが点けっ放しのまま。カウチには食いかけのポテトチップの袋。それとメッセージが小さなスヌーピーのメモ書きにあった。『ちょっと出てきます。すぐ戻ります。探さないで下さい』とね。それきりだよ」

ハチローはズバリ、

「心当たりは？」

と、聞いてきた。

ワシもそれに答えて、

「あるもんか。だいたい不可解な点が多い。テレビが点けっ放し。ケイタイも置きっ放し。あのメール気狂いの母さんが。それに天変地異が起こっても、ポテトチップを食べきらずに途中で席を立つような人間じゃない。これは何か極度に差し迫った事態に遭遇した証拠だ。違うか？」

ハチローは立ち上がり、壁に掛かったラッセンのリトグラフを眺めて、

「失踪・・・・・・・・あるいは誘拐」

ポツリと言った。

「営利目的の誘拐ならとっくに犯人から連絡があるはずだ。お前の方にも脅迫や要求は来ていないんだろ？」

ワシが訊くと、ハチローは黙って頷いた。位置的にその表情は窺えない。

「お前だからこんなこと言うが、母さんを営利目的以外に誘拐したがる人間がいると思うか？
ええと、何と言うか、そんな物好きが」

急に思うところあって、ワシはポンと膝を打った。

「物好き……自然保護団体か。あいつは毛皮マニアだったからな。ご禁制の逸品もあったようだよ。しかし誘拐までするかな」

ハチローはスカッと、

「父さん。とにかくこいつは、僕ら家族だけの問題だ。あまり食べてないようだから、何か作るよ」

そう言って、キッチンに消えた。なんて爽やかでテキパキした息子であろうか。目頭が熱くなった。

二人で素麺をすすって、西瓜を切って齧り付いた。夏だ。

ワシは袂に団扇で風を送り込みながら、

「お前、昨日は残念ながらノーヒットだったな」

親らしいことを言ってみた。

「ノーヒットが珍しがられるまでにはなったよ」

ハチローは万人を魅了する笑みを浮かべた。

「しかしまだ年間安打数記録は伸びそうだな」

「そうだといいね」

また微笑って食器を片付けると、

「父さん。シャワー借り手もいいかい？」

キッチンから呼びかけてきた。

瞬間、ワシは後頭部を錐で突かれたような鋭い痛みを覚えた。

「風呂場は故障中だ。どういじっても煮え湯しか出ない。明日、修理屋が来るはずだ。悪いが」

大声でそう言って後頭部をさすった。

ハチローめ、十分過ぎる気遣いがあるくせにたまに妙なことを言い出す。一体、目的は何だ。シャワーなんか自宅で浴びればいいのだ。

ハチローは眉を八の字に寄せて、

「OK。どうってことないさ」

そしてワシに、

「気晴らしに少し散歩でもしよう」

と、誘いかけてきた。

玄関から表へ出るなり干天の酷暑だ。太陽は中天にある。背の低い木製のスイングドア式門扉を開けて通りに入る。平坦な煉瓦敷きの舗道が続く。車道も煉瓦だ。ジープが車体を揺すってガタゴト通り過ぎた。関節が外れたような走りだ。

隣家は大きなヒマラヤ杉が目印のアンダーソン老夫婦宅だ。とも白髪の二人は杉の木蔭に椅子を出し、仲良くジュースを飲んでいる。ワシとハチローがその前を通ると生垣越しに、

「昨日はジェフのあわや長打をナイスキャッチ！ ホントにクールだよ君は！」

ハチローのファインプレイを亭主の方が讃えた。息子は軽く片手を挙げて応えた。非の打ち所の無い息子だ。ワシは甚平姿で亭主にお辞儀した。

「今度、自家製のラズベリージュースでも飲みに来てくれ」

亭主は右手をグルグルとホームランのジェスチュアみたいに回した。

途中、道端に楕円形の西瓜が大量に割れて、甘い腐臭があたりに広がり、蠅が群集していた。羽音がぶんぶんぶんぶんと喧しかった。

女房もワシに英語をもっともっと覚えろと喧しかったな。大体ワシは中学を出てそのまま製麺所に住み込んだんだから、もとより英語なんて無縁なんだ。ワシがスチュアーデスにバーボンを頼んだのに炭酸水持って来た日にゃ大笑いしておって、あいつめ。留学経験を鼻にかけおって。このワシがアメリカに住むようになるなど、一体誰が想像するっていうんだ。もう三年目だが日常会話がやっとだ。それでも上出来だ。

ワシは不意に襲ってきた考え事をあわてて振り払った。ハチローが中学生くらいの黒人の男の子三人にサインをせがまれ、それに応じていてワシひとり蚊帳の外だったから、つい放心した。

サインペンを走らせるポロシャツの背中からも、アスリートらしい背筋がはっきり分かる。プロだな、我が息子は。頭のとっぺんからつま先まで。ワシのような日陰のモヤシとはわけが違う。だから女房は自分似であると結論したのだ。しかしそれは単なる消去法だ。遺伝は消去法じゃない！ バカな女だ！

ミス・デイジーがゴムホースで自宅の芝に水を撒いていた。

「OH！ ハチロー！ 今日はオフなの？」

赤毛で小柄で信心深い彼女は息子の姿を見つけて気軽に声をかけてきた。

「それなら貴方も祈ってくれないかしら。壊れたスプリンクラーが直るか、ひと雨降ってくれるか」

息子はその言葉には反応せず、ひたすら腕を組みミス・デイジーの庭先を黙って真剣に見つめていた。ゴルファーがグリーンのラインを読むように。

ワシはまた放心しかけた。ワシはあの時、女房が観ていたテレビドラマを記憶している。ポテトチップを噛む枯葉を踏むような音も。ドヘヘヘヘという下卑た笑い声も。

息子は何度もワシを呼んでいたらしい。日差しが強すぎるのだ。

「父さんは覚えてるかい？ 僕が子供の頃、マチャアキの隠し芸で見たテーブルクロス引きを夢中でマスターしたのを」

そう言われてワシの額から甚平の胸元から汗が流れ落ちた。ふと我に返り、

「ああ。クリスマスの時とかに披露してたっけ。グラスも食器も割れなかった」

寝不足で目が回った。ミス・デイジーはずっと日曜の礼拝の話をしているようだ。悔い改めよ、みたいな話か。

「父さん。僕はこう思う」

ハチローはラインを読みきったように、決然と胸を張った。続けて、

「母さんの件が失踪であれ誘拐であれ、あるいは考えたくないけど殺人であれ」

一呼吸おいて、

「騒ぎを忘れる唯一の方法は、それよりもっと大きな騒ぎを起こすこと」

そう言って、ミス・デイジーの庭に深々と一礼すると、舗道と芝生の境目まで歩み寄った。

「ファイト~~~~~!!!!!!!」

屈み込んで両手を芝生の根っこにザックリ差し込み、思い切り自分の身体の方へ引っ張った

。

「いっば~~~~~つ！！！！！！！！」

テーブルクロス引きだ！

「ファイト~~~~~！！！！！！！！」

大砂塵が舞い上がり、足元がグラグラグラと揺れて、ワシは地べたに這った。

「いっば~~~~~つ！！！！！！！！」

聞いた経験は無いが、地表が裂ける音が耳を聳した。

「ファイト~~~~~！！！！！！！！」

砂塵で視界が利かない中、悲しい息子の絶叫が響き渡る。

ワシの記憶もここまで。

地球上の地表が剥がれ、全世界の建造物は横転倒壊あるいは海に転げ落ちた。

星占い

桃栗三年某月吉日の運勢

おひつじ座

今日はオチの無い落語のような一日。

学校や職場でいきなり花見や仇討が始まるかも。くるくる家が回っても遺産放棄はしないで。短気は損気。

頭にきたら「寿限無」を三回。途中で噛んだら最初から。

ウドンコ病に注意。

おうし座

ラッキーな人物との出会いの暗示。

尊敬する作家、憧れのミュージシャン、まだ会ったことの無い配偶者とか、半透明な父親、亡くなった母親や

インコ、金魚などなど。

ただし前から数えて二列目の人には注意。

ふたご座

信号待ちが長すぎてトラウマになりそうな一日。

あまり結果を焦ると、朝から夕刊が配達されたり、乗ってもいないタクシー代を請求されたり、恋してないのに

胸が痛くなったりする。

星占い

現代病に注意。

かに座

今日は理想と現実と非現実と仮想現実とのギャップに苦しみそう。理想は非現実と、現実には仮想現実と

それぞれ対極において相互作用して引き合い、理想の非現実性と現実の仮想現実性を強調する。

隣り合う

現実と理想、非現実と仮想現実はいかに扶助し合いながらも永遠に交わることは無いので気に病む必要は無い。

しし座

波乱万丈の一日。

ケンカや小さな諍いは言うに及ばず係争、事件、事故、革命、戦争、天災に巻き込まれる。

ただし、これらが発生し影響を及ぼすのは、すべてあなた一人の身の上に限られるので、世界は静寂のまま。

注意のしようがない。

おとめ座

不安定な一日。

バランスの悪い三本脚または二本脚、一本脚の椅子に坐って倒れなければ吉。

四本脚の紳士には注意。

星占い

てんびん座

厄日。

身も蓋もないことを言われミソもクソも一緒にされ目くそ鼻くその扱いを受けてウンともスンともいえない日。

ここまで言うておいて、ラッキーアイテムもヘチマもないかも。

さそり座

長年の夢が叶った、と思ったら夢だったというような夢を見そう。

夢は人生の裏ドラのようなもの。生来、表ドラだけで充分という者もいれば、裏ドラを望むクズ手の者もあるし、

手役充分でもリーチを掛けてくる者だっている。夢とは、かくなるもの。

引っかけに注意。

いて座

秘密がばれそうな日。

「そもそも日本人を発明したのは中国人」

「陳さんという人。ご内密に」

「はたまたアメリカ人を開拓したのも中国人」

「張さんという人。みんな陰で笑ってる」

「冷やし中華始めました」

星占い

えへへへへ、へへ。

やぎ座

イギリス人とフランス人がルールも知らずに将棋を指して王様が行方不明のサイン。
木を隠すなら森。石ころなら浜辺、死体なら戦場。不吉。

みずがめ座

エレベーターで上へ行くか下へ行くか決めかねているのが見えます。
王様が乗り込んでくるのを待つべし。

うお座

ボタンの掛け違いのようなもどかしい日。

「違う違うチュウハイなんか頼んでないよロイヤルミルクティーだって、そう、どう聞き間違えるとそうなるのかなあ、

だから明日じゃなくて今日だって今日、支払うんじゃないよ集金だよ集金、損してどうするのよって、ほらチーじゃなくてポン、發はチーできないでしょ普通、もどかしいなあもお～、だいたい僕が好きなのは娘さんじゃなくてお母さんの方、あなたですよあなた、お父さんは出てこなくてよろしい、決まってるでしょ卑猥じゃなくて猥褻はいはいはい、いかにも。うわっっっっ！

君い、誰？　なんでいきなり刺すの？　ひ、人違い～？　えええええええ、も、もどかしいなあああ」

おうおう武ちゃん、よく来てくれた、いらっしゃい。そんなとこ突っ立ってねえで、まあこっちへ坐ってくれ。やあ、タンベはとんだナニで店に入れねえで悪かった。せっかく飲みに来てくれたのにな、すまねえことをした。やっぱりどっか他へ飲み行っちゃったかい。ほおほお、なに喜多川へ。あすこは言っちゃ何だが高えだろ。なあ、そうよ、べら棒さあ。

かさねがさね、すまねえことをしたね。ま、ビールでもひとまず飲ってくれ。店のおごりだ。おい婆さん、武ちゃんにビール出して。まったくテレビ屋ときた日にゃ、遠慮ってモン知らねえから、取材取材ってあれじゃ馴染みの客が散っちゃうよって俺あ、いつも言うんだがね婆さんがテレビ好きで聞く耳もたねえ。次から勝手に話を受けちゃう。出たがりに出来てるんだな、生来。おいビール早くしろよ、気が抜けねえうちによ。番組名かい？ 何てったかなあ、え？ 「見知ゆるん店ガイド」そうかい、そういうことだきゃ覚えがいいね婆さんは。俳優一人で後はテレビ屋。俺あんな俳優見たことねえけど。有名なのかい。ふうん。だけど俳優のくせにグルメだかぐるぐるトットの目だとか、そんな番組にのこのこツラ出すってのがまずダメだな。貧しいよ。了見がさ。色紙にサインしてったっけ。どこ置いた？ 新聞入れにでも放ってあるか。あらっ、婆さん飾ったのお？ よせやい、しょうがないねまったく。大掃除の時んでも外せよ。それよりどうだ武ちゃん、いい刺身だろ。うまいだろ、な。武ちゃんは、この刺身なんの魚ですか、なんて野暮なこと聞かねえからいいや。魚だって海のもん川のもん湖のもん、下手すりゃ木登りするものいるからな。人間腹へってりゃなんでもうまいし、お天道様が沈みや酒がうまいし。ああ、酒は日中でもうまいか。とにかく了見が貧しくなっちゃいけねえよって話さ。あのあんにゃもんにゃな俳優いちいちつまんねえこと聞いてくるのよ。それが仕事って言っちゃまえばそれまでだけどね。串揚げ食っちゃあ、ご主人これとてもジューシーな肉だけどなんの肉なんだろうって、野暮なこと聞くなよ、肉は肉だろ、うまけりゃいいだろ、細けえこと聞くなよ俺だっけ知らねえってそこまで、なあ。冷蔵庫に手え突っ込んでたまたまくっ付いてきた肉さばいて串刺して油に落とすだけよ。こちとら忙しいんだからさあ。商売なんだから。手前で食って分からねえこと人に聞いて恥かかすなって。牛食ったつもりで実は豚でしたって言われてうまさ半減するか？

しねえだろう？　なあ、武ちゃん、しねえだろう？　おまけに昔フランスに住んでたなんてスカしたこと抜かすから、まかないだって嘘ついて食わしてやったんだよ。なにをって、写経米に煮込みぶっかけて。あれ？　写経米、知らねえかい？　二百六十二粒の米ひとつぶひとつぶに一文ずつ般若心経が書いてあるってえシロモノ。食ったよあの俳優、残さずガツガツと。煮込みはフランスの有名シェフが来日すると必ず食べに行く店があって、日本文化のどうたらこうたらってほざいてるうちに、急に口から般若心経が飛び出してさ、へへ、もうこうなると三日三晩読経が止まらないって寸法よ。人助けさ。あのあんにゃもんにゃも、少しは悟ってまっとうになるんじゃないかな。へへへ。先週は「人生最期の一軒」てえ番組が来てさ。レポーターの一発屋おばちゃん歌手はもっと面白かったな。メに「ここ有り」食ったんだ。「ここ有り」てえのは符丁で「底無しラーメン」ここ有りそこ無しって洒落よ。ほら、あすこのテーブル席見てみねえ、あのおばちゃん歌手一週間あすこでずっとドンブリかかえたまんま。なにしろ底無しよ。ぶつぶつ独り言言いながらず〜っと食ってる。武ちゃん毎日のように来てて気がつかなかった？　あれ、どこ行くの？　武ちゃ〜ん。お〜〜い。タバコなら店にあるよ〜〜〜

気持ちの良い秋晴れの日曜、昼近く。

大あくびとともに体を思い切り伸ばしてから、いざ起床。しばらく振りの休日だ。コキコキ首を鳴らしながらリビングに入った。

二歳半になる娘がプラスチックの洗濯カゴの中にしゃがみこみ、窮屈な風呂に入ったような格好のまま、テレビアニメを観ていた。

「麻里。おはよう」

オレはリビングを占拠している玩具やアンパンマンやポニョやメルちゃんどもを足でジャラジャラさばきながら前進した。

娘はオレを見上げ、

「父ちゃん、おはようのの」

と、スマイルしてくれた。

まさにイズンシーラブリーだ。

コーヒーを淹れて飲んでいると、家内が近所のお使いから帰ってきた。

「タッチ交代でオレたばこ買ってくるわ」

そう声を掛けて着替えると、娘が、

「父ちゃん、どこ行くのの？」

と、聞く。

「コンビニ」

ツツカケを履いて玄関を出たが、出たなり隣室の金子さんの奥さんにバッタリ会いちょっとドキドキ。美人なのだ。マンションは三十年ローンで負担だが、こんな思いがけないオプションが付いてくることもある。

「いい天気ですね」

「天高し、ですか」

エレベーターも一緒にときめく。金子さんは外出着だが用向きを聞くのは控える。

憧れのエレベーターガールも今や絶滅したな、そんなことを妄想し、香水の匂いを嗅いだ。ふわりと魂がワープしそうになった。本日は出足好調だな。

一階に着いてマンションの入り口を出て、奥さんとはそこで右と左に泣き別れ。普段から不満げな顔の管理人のジイサンが何やらぼやきながらエントランスをデッキブラシでゴシゴシこすっていた。

コンビニでたばことスポーツ新聞を買い、あまりの好天に先の公園まで足を伸ばした。

日曜のせいか父親と子供の組み合わせが目立つ。サッカーボールを蹴り合ってみたり、一緒にベンチでドーナツを食べてみたり。

大きな榎の木があり、子供たちが群れているので寄ってみると、団栗拾いだった。オレもひと粒拾ってみれば、まだ青くて帽子も新品な初々しい団栗だ。娘に持って帰ろうと、潮干狩りに参加するようにオレもしゃがみ込んだ。次第に熱が入ってきて、最終的に両掌に三杯分の大収穫だ。新聞が入ったコンビニのレジ袋にざらざら流し込んだ。

ベンチに坐ってゆっくり一服つける。まさに身の隠し場所の無い真澄の空だ。子供たちが今度は拾った団栗を放ってぶつけ合っている。一句浮かんだ。

子の放る団栗の実の青きかな

隣のベンチの子連れのおバサンが、オレのたばこが煙たいという迫真の演技をしているので、うんとこしょと腰を上げた。

おや？ と気付いたのは小平さんの家を通り越してからだ。おやおや？ 小平さん宅の次がいきなり戸塚工務店のビルだ。二軒の間のうちのローズマンションが無い！どこにも。消えた。

「摩訶不思議な！」

オレはレジ袋をぶら下げたまま、途方にくれた。幾度見ても小平さんと戸塚工務店ビルは寸分の隙間も無く隣り合っている。

どういう心理か、小平さん宅のインターホンを押していた。

「はいはい、どなたで？」

小平さん宅のお爺さんが出た。

「あのですね。隣の者なんです。失礼ですが、小平さんのお宅の南隣はローズマンションでしたよねえ」

「あなた、郵便屋さんかなにかですか？」

「いいえ、隣の住居人です。繰り返しになりますが、小平さんのお宅の南隣はローズマンションですよ？」

少々、間があってから、

「昨日まではそうでしたかな。今日はまだ表に出とらるので、なんとも言えませんが」

「あ・あ・あ・あ」

オレも意味のない問答をやめた。小平さんや戸塚工務店の証言が取れてどうなるというのだ。

あっ！ オレはうっかりしていた。ケイタイというものを持っていたではないか。あわてて尻ポケットから取り出した。麻里が生まれて緊急時のために持たされたのだ。本来ケイタイは大嫌いなので忘れがちなのだ。

家内のケイタイとはすぐ繋がった。

「あ、もしもし。どこに消えちゃったの？」

オレは訊くと、

「なにが消えたの？ それよりどこまでたばこ買いに行ってるのよ」

そう切り返された。

「いや、麻里に団栗拾っててさあ、いや、もうマンションの前にいるんだけど、マンションの前にはいないんだよ」

「訳わからない。お湯が噴きそうだから切るわよ。昼ごはん麻里の分しか作ってないから、どこかで食べてきてくれると助かる」

切れた。

小学校からの地元の親友にいきおい電話すると、ゴルフ場にいた。クラブハウスで昼飯の最中だった。まわりから笑い声が聞こえる。

マンションが消えたことを上手く話そうとするが、こんな状況が簡単に伝わるはずもなく、

「大丈夫かい、最近お前さん疲れすぎだよ。仕事もいいけどスポーツやんなきゃ。発散しなきゃ。住宅ローンの返済がきつくて、見える物も見ようとしてないんじゃないの？ 現実逃避ってやつ？ 厳しい現実が直視できない」

彼はそれから、しきりにゴルフを始めるように薦め、なんなら会社の人間が使っている心療内科を紹介するとまで言った。午前中スコアが良かったそうで、上機嫌だ。

短く挨拶してオレから電話を切った。

確かに最近疲れているが。もし心療内科で頭の病気でも発覚したら。

家内と子供の顔が浮かんで、ぞっとした。

とにかく気を静めよう。家内の言うとおりでどこかで昼飯でも食って落ち着こう。オレは自分をそう勇気付けた。ケイタイが通じるということは、少なくともマンションは圏外に消えたわけじゃないのだ。

長寿庵に入った。昼時でひとつだけ空いているテーブルに通された。家族連れが多く、ひどく騒々しい。

レジ袋をじゃらんと置いて、走り回っている店の女の子にようやくおかめうどんを頼むと、横のテーブルから名前を呼ばれた。知り合いの大工の棟梁とおかみさんが蕎麦を食い、昼間から一杯ひっかけていた。

「どうしたんだい。不景気な顔してよお」

棟梁が赤い顔をして話しかけてきた。すでにいい調子みたいだ。最近はず席がちだが町内の俳句会仲間なのだ。

「どうしたもんでしょうかねえ？」

と、オレ。

考え込んで、塞いでいるふうに見えたのだろう。

「どうしたもこうしたもないだろう。いい若いもんが、元気出せよ。ま、理由はともあれ」

あはははは、と笑った。

「ちょうど今さあ、一句閃いたんだよ。聞いてくれよいいかい。笑うなよ」

棟梁が、そう前置きして、

「新蕎麦を、なっ、新蕎麦を、古女房とすすりけり。なっ、お粗末」

また、あははは、と笑った。今度はおかみさんも一緒に笑った。

棟梁は反応の薄いオレを見て真顔になり、

「なんだよなんだよ、おい、ホントに大丈夫かい。お前さん、ええ？ うちらなんかに話せることかい？」

オレは事の次第を手短に喋った。

「家が無い。そりゃアンタ穩やかじゃない。ホームレスってことかい」

棟梁は声を落とした。やっぱり理解していなかった。

「そりゃ、おかめうどんなんか食ってる場合じゃないよ」

おかみさんも棟梁のひと言ひと言に頷いている。

「でもまだ若いんだ。しっかり気を持ってな。奥さんも子供もいるんだから。頑張れよ、な。理由はともあれ」

その理由が問題なんだが。飲んでる勢いで背中をバンバン叩かれた。

めでたくマンションが出現してるかな。ドキドキしながら舞い戻ってみたが、甘かった。

それどころか今度は、小平宅と戸塚工務店ビルの間にお寺がどでん！ と建立されていた。頭が真っ白になってしまった。でっかい竜宮城のごとき門構えだ。ずっと奥に本堂がある。

心療内科という単語が頭のなか一杯に渦巻いた。

尻ポケットのケイタイがちんちろりん♪ 鳴ったが、呆然として取れなかった。この異常事態は一体どこに向かっているのだろうか？ 朦朧としてケイタイをチェックするとやはり、家内からの着信履歴があった。掛け直すと、

「はやく出てよ」

と、叱られた。

「もうご飯食べた？」

オレは力なく、

「おかめうどん食べた」

「じゃ、帰りにコンビニでモア、って雑誌なんだけど、買ってきてくれない？ さっき買い忘れたの。オーケー？」

「それはいいけど、うちのマンションが見つからないんだ。何故か目の前にお寺があるしさあ。どう説明したらいいんだろう、この状況を」

やっぱり狂ったのかな、オレ？

「子供じゃないんだから迷子だなんて言わないでちょうだい。だいたいあなたは人間がぼんやりしてるんだから。曲がるどころ間違えてない？」

今は家内の辛口に取り合っていられない。何でもいい、何かアクションを起こさなければ。

「あのさあ、ちょっとベランダに出てみてくれないか。私道側の方」

「なに？ なんかのサプライズ？」

「いいからいいから」

しばしして、

「あら、下にいるんじゃないの」

と、家内。

「えっ、オレが見えるのか！」

オレはケイタイに耳を当てたまま、住居があるはずの三階部分あたりを見上げたが、山門から上はあまりにも透明に澄んだ青空があるばかりだ。

「そこから手を振ってみてくれ！」オレが言うと、

「ナンセンス」

切られた。また切られた。

ああ分かん分かん、さっぱり分かん！たばこをイライラと吸い終えてツツカケで踏み消すと、

「そこのかた、門前を汚してはなりませんぞ」

法衣を着た坊さんにたしなめられた。

「あなた、この寺のかたですか？」

オレが尋ねた。

「当山の住職です」

西郷隆盛を髣髴とさせる、医師堅固な表情の偉丈夫だ。冗談みたいにでかい。ちょっとした彫像くらいある。

「失礼だが、どこか心に迷いごとでもおありのご様子」

住職の声はその巨体に共鳴した。ご明察だよ、実際。

「そう見えますか。確かに迷ってます。家が見つからないのです。ローズマンションという四階建てのマンションです。この寺の位置にあったはずなんです。いや、あるんです。一体全体、この寺はどこから降って沸いたのですか？」

住職さん、あなたご自分でおかしく思いませんか？ 明らかにおかしいですよ。いきなり他人の土地に現れて」

オレは家内に当たれないので住職にからんだ。

「そう言われてみれば、いつもとかなり見晴らしが異なりますな」

住職は巨眼をぎょろりとあたりに巡らせたが、あくまでも泰然としている。裁判にでもなったらいやな相手かも。どう争えるのか不明だが。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」

住職が朗々と謳いあげた。どこまでも響き渡っていくコダマみたいな声だ。

「鴨長明の方丈記ですよ。よろしいかな？」

何が、よろしいんだろう。

「一行飛ばして。世中にある、人とすみかと、又かくの如し。無常観ですな。昨日のあなたの家は今日はわたくしの家かもしれない。昨日のあなたの奥さんは今日はわたくしの、いやご馳走様」

「わあ！ もう冗談はたくさんだ！」

なんだよ、大人しくきいてれば。オレは住職の言葉を断ち切ってその場から遠ざかった。

「参禅されたければ、いつでもいらっしゃい」

背後からダメ押しがコダマした。

役所は休みだし、警察に相談してもどんな対応されるか知れたもんじゃない。いきなり拘束衣でも着せられて、どこか施設に放り込まれるかもしれない。

そこへいくと、心療内科は日曜も開業しているケースが多そうだ。これ以上もとの日常に戻らない時は、話だけでも

聞いてもらうか。オレの散々な苦勞話だけでも。医者が少しでも不審そうな顔をしたら、逃げてくればいい。

なんせ文字通り行き場が無いので、仕方なしに家内に頼まれた雑誌を買うため、コンビニに入った。

ごまかしだが、出来ることをして気をそらすしかない。そうでもしていないと、本当にヘンになりそうだ。オレは一度強く頭を振った。

モアってファッション誌だろうな、うちのマガジンラックに入っているのを見た記憶がある。モアモアモアと女性誌が置かれてるコーナーをためつすがめつ眺めるが見つからない。念入りに見渡したつもりだが、やはり無い。売り切れか。

横で立ち読みしている若い男の本の背表紙を、あてもなく覗き込んだが、きわどいゴシップ写真誌だった。首をネジって見上げる不自然な姿勢のオレと、男の目がふと合った。モアを読む人種ではなかった。キャップを後ろ前に被り、耳、鼻、口、所狭しとピアスが鈴なり。胸板がTシャツの下で隆起している。

「なに見てんだよ、おい」

男が押し殺した声で言った。

「いや、表紙をちょっと・・・・・・・・」

相手を確認してから覗けばよかったかなあ、オレは後悔した。

「笑ってんじゃねえぞ、オヤジエイ！」

今度は声を荒げた。

笑ってない笑ってない、笑ってる心のゆとりないし・・・・・・・・厄介だなあ、もう。

しかし男は急に猫なで声になり、

「まあ、いいや」

と、剃った薄い眉の下の細い目を和ませた。

「それよりオッサンこの子知ってる？」

ニヤニヤしながらそう言って、見開いたヌードグラビアのページをオレに向けて差し出した。オレが反射的に前かがみになったところに、膝蹴りがきた。顔に漬物石が当たったような襲撃にオレは後ろに尻もちをついた。それから鼻血がブツと吹いた。レジ袋から娘へのみやげの団栗が波のように床に散らばった。

気の狂った猿みたいな叫びを上げながら、男は店の外へすっ飛んで逃げていった。

気付いた店員の茶髪の女の子が「大丈夫ですか？」とすぐに売り物のタオルを持ってきてくれた。鼻血はしばらくして治まった。オレはタオル代を払い、ふごふご店員の子に礼を述べ店を後にした。

まったく奇妙奇天烈な世界に迷い込んでしまったもんだ。ひょっとしたら地層の境目みたいな場所にいるのか。さもなくばオレじゃなくて、世界が狂ったんだらう。

オレは血に染まったタオルを鼻あたりに当て、肩を落として横丁を曲がって私道に入った。

娘の麻里は今頃、何してるかなあ、起き抜けに顔を合わせたのがはるか昔のことのようだ。人生最悪の日だな。本当に帰れるのかな我が家に。

気持ちが一気に暗くなった瞬間、金子さんの奥さんが正面前方三十メートル付近を此方へ歩いてくるのを発見した。

希望の香りがした。オレは一転、希望を逃すまいと走り出した。奥さんはローズマンションの入り口があるべきあたりで、体の向きを変え、姿を消した。オレが息せき切って辿り着くと、ささやかな夢を笑うように山門が偉容を誇って立ち

はだかっていた。しかし、オレは躊躇せず、両開きにされた門から奥さんの影を追って、寺の境内に突入した。

すると奥さんの影はおろか、何故かもとの私道に戻ってしまい、宅配ピザのバイクに轢かれそうになった。回転ドアかい、こりゃ??????????

オレは意地になって何度もトライしたが、結果は同じ振り出しに戻されるばかり。エッシャーだって絶対こんな絵描けない。

山門と私道を挟んだ向かいのアパートの段差部分のコンクリート床に坐り込んで、オレは長い溜め息をついた。

もう投了かな。もうお終いにしようよ。もう降参降参。もうたくさん。堪忍してください。リングマットを叩いてタップしそうだったが、ケイタイが震えてメールが届いた。家内からだった。

『モア発売あさってだった。えへへ。すまんすまん』

こんな文面の中で、珍妙な黄色い絵文字生物がひたすら謝っていた。近頃は謝罪もメールでお気軽に、か。

オレは力なく、記念に保存してある一年前の娘からの初メールを開いた。家内のケイタイをいたずらしてるうちに偶然に送信されたものだ。

『んなふらあ』

メール文はこれだけ。んなふらあ。麻里、これは何語なんだい？ 麻里よ～～

鼻の奥から鉄さびっぽい血の臭いが甦り、涙がちろりと出た。

「んなふらあ、か。んなふらあ。んあふらあ」

オレはヤケクソで、

「んなふら～～～～～！」

叫んだ！

すると、

「父ちゃん、どこ行ったのの？」

麻里が家内に抱かれて、目の前にいた。

おまけに我が愛しいローンたっぷりのローズマンションが出現しているではないか。ああ、なんという……バラ色の壁タイル、装飾過多なエントランス、ぼやきながら雑巾掛けする管理人のジイサン。

「麻里が父ちゃん迎えに行こうってうるさく言うのよ」と、家内。

「そうだったのかい。麻里がそんなことを」

「父ちゃん、どこ行ったのの？」

「コンビニだ」

所詮、女に話しても詮無い話なので、オレはそれだけ言った。